



2006 月 1 月発行

十字架のもとで

「イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、『婦人よ、御覧なさい。あなたの子です』と言われた。それから弟子に言われた。『見なさい。あなたの母です。』そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。」

(ヨハネによる福音書 19 章 25～27 節)

主イエスの十字架のもとには、イエスの母マリアを含めた 4 名の女性と、1 名の男性が最後までとどまっていた。この男性は、“愛する弟子”、と言われていただけで、それが誰なのか明確ではありません。他の弟子が皆イエスを見捨てて逃げ去り、自分の家に戻って行ったのに、彼だけは、最後までイエスに従い、最後に至っても、ただ遠くからイエスを見守るのではなく、十字架の直ぐ近くにとどまり続けました。だからこそ、主イエスの声は直接彼に届いたのですが、主イエスはいまわの際に、彼に、御自身の母を、「宜しく頼む」、と託されました。それ以後彼は、マリアを自分の家に引き取った、と言います。

愛する弟子とは、ゼベダイの子のヨハネとも、ヨハネによる福音書を生み出したヨハネ教団の創始者とも言われますが、はっきりしたことは分かりません。ただこの弟子が、理想の弟子として、この福音書で描かれていることは確かです。最後まで主イエスに従い、十字架のもとにとどまり、主イエスに深く信頼され、主イエスにとっては心残りの母マリアの面倒を託されると、危険をも顧みず、直ぐに、これに応えたのです。主イエスの弟子と呼ばれる者にとって、これに勝る理想の姿が、外にあるでしょうか。

かつて主イエスは、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない」(マタイ 10 : 37)、と言わ

れました。まるで肉親の情を否定するかのような言葉です。事実、主イエス御自身、この言葉通り、肉親の情を一切断ち切って、父なる神への愛を第一にされ、徹頭徹尾これに従い、その結果、十字架の死を迎えるに至ったのですが、しかしやっぱり、子として、自分亡き後の母マリアのことが気掛かりで、苦しみの極みにありながら、尚母への心遣いを忘れずに、十字架の上から、愛する弟子にこれを託されたのです。主イエスは、肉親の情を否定されたのではなかったのです。ただ、これを神への愛の上に置くこと、従って、結局は、神を蔑ろにしてしまうことを、厳しく戒められただけだったのです。

この時以来、愛する弟子はマリアの子となり、マリアは愛する弟子の母となったのですが、これは単に、新たな一つの養子縁組が成立したことを語るだけの話しではありません。実は、此処に神の家族、即ち教会が誕生したことを、暗に告げているのです。主イエスがかつて、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」、と問われ、「ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」(マルコ 3 : 33 以下)、と言われました。神の御心を行う者は、互いに兄弟、姉妹、また母になるとは、つまり、一つの家族になるということで、これこそ外ならない、神の家族(エフェソ 2 : 19)、と言われる、教会を指すのです。十字架のもとに集まっていた者たちによって、言わば、最初の教会が、正確に言えば、最初の教会の核とも言うべきものが、生まれたのです。これは教会の変わらぬ本質です。

つまり教会とは、主の十字架の下に集まる者たちが、十字架の主によって結び合わされ、一つの神の家族とされたものであって、だからこそ、十字架の主を見失い、十字架の下に立つことを忘れては、たちまちにして崩れてしまう群れである、と言うことなのです。お互い深く肝に銘じたいと思います。

牧師 三輪恭嗣

(2005 年 1 月 6 日の礼拝説教より)